恩と怨あざなえて

コトブキヤ育英財団は四十人の学生に奨学資金を提供し、年に一度役員をまじえた懇談会をもっている。席上、私はこんな話をした。

―名知事とうたわれた木下郁先生はよく言われた。「ひとにした恩はすぐ忘れよ、ひとから受けた恩は一生忘れるな」と。諸君にはお返しのいらない奨学金であるからこそ、その代わり社会に出たら本気でお返しすべきである。

しかし、そう言う私が大きなミスを犯していたのに今気がついた。お隣に杉村先生がおられる。二十五年前、私は勤務中、急病で県庁から杉村病院に運ばれて命を救われた。今ここでお会いするまで茫々二十余年、そのご恩を思い出していなかったのである。こうした忘恩の数々に責められる私の晩年。せめて少しずつでも消していく余生にしていきたい。―

隣席の杉村さんは全く覚えていないと言われたが、それだけになお心苦しい。

毎年三月末になると、県の退職者の名前を目にする。私の世話で採用されたいきさ

つの人もたまにまじっているが、ひとによっては年賀状も退職あいさつも頂いていないことに気づかされる。木下先生の戒めに反して恩きせがましい自分が嫌になる。相手はお世話が不十分と、逆に怨(うら)みに思っているかもしれないのだ。

逆の場合もある。某年の激しい知事選で私がある県職員を非難したことがもとで、「見返してやる」といって退職したということを後で伝え聞いて、辛(つら)い思いをした。しかし転進は成功して、やがて某市の市長に。福祉関係で私の息子がお願いにいくと温かく応対され、私によろしくと言われたそうだ。怨は怨のままではないらしい。

私はロマン・ロランの言葉を思う。「私の敵こそは私を怠惰(たいだ)から救ってくれた」と。私にとって敵はいつまでもそうあり続けている。

（一九八六年五月十四日）